

聞や雑誌で先刻御承知のことと心得まするから畧いたしまして、直に評判に取掛ります。

物知り

頭取一寸待つてもらひたい、一昨世間では、この人の名を「がぼう」と呼びますか、それは間違でございます、狩野雅信の諱の一字をもらつて付けたのだから、眞は「たゞくに」と讀むのでず、御注意までに申しておきます。

老人

明治の十二三年の頃は、例の文人書全盛の時代であつて、雅邦などは喰ふや食はずに困難をしたので、その頃は雅邦

の家も今とは大反對で、二間か三間の陋屋で僅かに雨露を凌いで居つたのだ、今更回顧すると、まるで夢のやうだ。

崇拜者

つらく雅邦先生の書を拜見いたしまするに、最初は勤めて常信や探幽の法を學び、更に一躍して永徳や元信を學び、老後いよく進んで雪舟や蛇足などの妙處を窺ひ、水墨の妙、實に東山の精華を咀嚼し盡したと申しても、決して溢美でない。蓋し當代の大畫伯で、雅邦の名は、永く美術史上に輝くことと思ひます。

河越連中

あまり嬉しくて、ほろ／＼涙がごぼれる、真に土地の譽でございます。

わる口

なんだ東山の精華だ、雪舟や蛇足や三相などが地下に知るあらしめたら、損害要償の訴訟を起すであらうよ。能くよく目をぼじつて見よ、ちよい／＼とやらかして居る、手際がうまいから、貴様たちには見えぬだ。

色彩家

一體雅邦と云ふ人は、木挽町で塾頭を勤めたといふが、眞實の彩色法などは、未だ學んだことがないものと見える、こ

の人の色彩なるものを拜見するに、一つとして聞ふて居るものがないやうです。

頭取

さて先生の書の就いては、先刻から色々の御説もありましたか、兎に角明治の老大家に相違ございません、この位で切ることに致します。

河越連中

萬歳／＼。

總評

頭取

東西、評判も大分進みまして百何人とまで註されまし
た、まだく澤山ございまするが、ぶつとこれ位に切上げまし
て、これからは總評を願ひますることに致します。

大勝

賛成く。

道學

扱て昔の畫家と今日の畫家とを比較して見ますると、
大變な相違があるやうてございます。一體、繪畫と申すものは、
今更拙者が申上りますまでもなく、至極高尚な技藝で、百工の

母でありますから、六籍と功を同うするとまで讚嘆してござ
います。されば古代の畫家などは、第一に心術を治め、人間
富貴利達のことなどは、悉く之を浮雲に看過し去つたものでご
ざいます、然るに今の畫家は何の様でございます、殆どお話に
もならず、鼻つまみの所行の多い人があります、實に慨嘆に
堪へんじやありませんか。

新聞記者

然りく、實に道學先生のお説の通りです、大分に三
面の種を買いてくれられますわい。

商人

繪筆よりも算盤玉をはぢかしたら如何かと思はれるほ
どの唯利主義の大家もあります。

仲間

頭も軽く、お口も軽く、權門や富人に取入つて御機嫌
をとることが、なか／＼お上手のもございます、私共も油断な
らないでげすよ。

藝妓

酒の上も面白く、喉もうま／＼、隅におけない方があり
ますよ、ですけれど、嫌に額ばかりテカ／＼光らして氣障なま
ねをする奴があるには、實閉口するのよ。

娼妓

一晩でも大門をくぐつて赤い桶襦を見なければ気がすまぬといふ人もありんす、いけすかないよ。

新聞記者

豈唯に花柳の巷に出入して酒色に耽るのみならむや、中には他人の妻妾と通し、又は之を横奪して、自ら以て好男子とするの痴漢もなきにあらず。

道學家

嗟乎、當世畫家風儀の頹敗すること、一に何ぞ甚しきや、豈に浩歎に堪へ可けんや、その畫の聖凡相分つも亦た理なしとせんや。

批評家

雪舟の如き畫を作らんと欲せば、雪舟の境界に到らざれば能はず、山樂の如き畫を作らんと欲せば、山樂の境界に到らざれば能はず、慧心の如き畫を作らんと欲せば、慧心の境界に到らざれば能はず、ダビンチの如き畫を作らんと欲せば、ダビンチの境界に到らざれば能はず、シヨンベリニの如き畫を作らんと欲せば、シヨンベリニの境界に到らざれば能はず、總べて畫家たらん者は、先つその心術を修め、その境界をして高高なる地を占め、富貴利達の事を冷眼視し去つて、その筆、その

心共に研ぐにあらざれば不可なり、この故に、我輩は今日にも
いて畫家徳育を以て急とす。公立の美術學校は固より言ふまで
もない、私塾を立て、後進畫家を養ふ所の先輩は、この徳育に
心を用ひてもらひたいのです。事此に出でずして、唯だ物の形
を描くことのみを教へて居るのは、その枝や葉ばかりに肥料を
與へて、肝心の根を捨て、よくやうな話であるのだ。

頭取

皆様のお説を承はつて、大抵當時畫家の状態も明かに
知れました、中にも批評家先生のお説は至極尤のことであらう

と存じます。先づ今回はこれで終結といたします。皆様のお手
を拜借して、もらひませう。

大勢

拍手、シャン／＼。

當世畫家評判記畢

九鬼男爵題辭 大岡育造君序 矢野三郎君序 大岡長峽君序
秋元子爵題辭 徳富蘇峰君序 林 忠正君序 久保田米僊述

米僊畫談

全一冊 口繪寫真版八面
正價金六十錢(郵税八錢)

本書は 久保田米僊畫伯が、滿腔の蘊蓄を傾け盡したるもの、日本美術の沿革諸派の長短、畫法論、繪畫と百般工藝との關係等、悉く之を説き、其他藝苑遺事に、三百年間名家の逸話を説き、一讀笑ふべく、覺へず快哉を叫ばしむ。又畫伯の自傳あり、一種の立志譚なり、世の畫家、彫刻家は勿論、文學家、百般工藝家等必讀すべき一大快書なり、

津田 南溟著 **古今書畫名家全傳** 正價金三十錢 郵税六錢

本書は往古より明治に至る迄、書畫に名ある士、二千百七十餘名を撰み、一々其人の傳記を擧げ、イロハ分けとなじ、以て索引に便ならしめ、加ふるに大家の落款印譜を附せり、抑も此の如き類書、坊間には流布するもの尠なからずと雖、編纂の懇切なる、此書を措て又何處にか求めんや、實に鑑定家は勿論、書畫を愛する人士には便益無比の寶典なり

發賣所 東京市日本橋區中通 **文祿堂書店**
電話 本局八十八番

澁谷小波君序
 山岸荷葉君著
 猶未請方君畫
 鳥居清忠君畫
 大村金邦君畫

古今無類の美本
 再版出来
 定價三十五錢



花の都に色深く、五人揃ひて生粹の神田音ち。
 清き雪間に若葉を摘むが如き風情はお京よ、紅梅のな
 まめくをお大にたふべくば、お瀬は寒牡丹のおこれ
 るにさも似たり、水仙の憐れなるがお違ならば、さて
 は福壽草のあどなきはお様の上の、いづれをいづれ、
 香をききよ、美しくの展すがた。

東京市日本橋區東中通 文祿堂發行 寶樹全
 の電話 本局八十八番 初書林

明治三十六年三月九日印刷
 明治三十六年三月十二日發行

定價三十錢 (郵費別)

發行所 東京市日本橋區橋正町壹番地 文祿堂書屋
 印刷者 東京市日本橋區西船場町二十六七番地 堀野興七
 印刷所 東京市日本橋區西船場町二十六七番地 石川金太郎
 電話本局八十八番

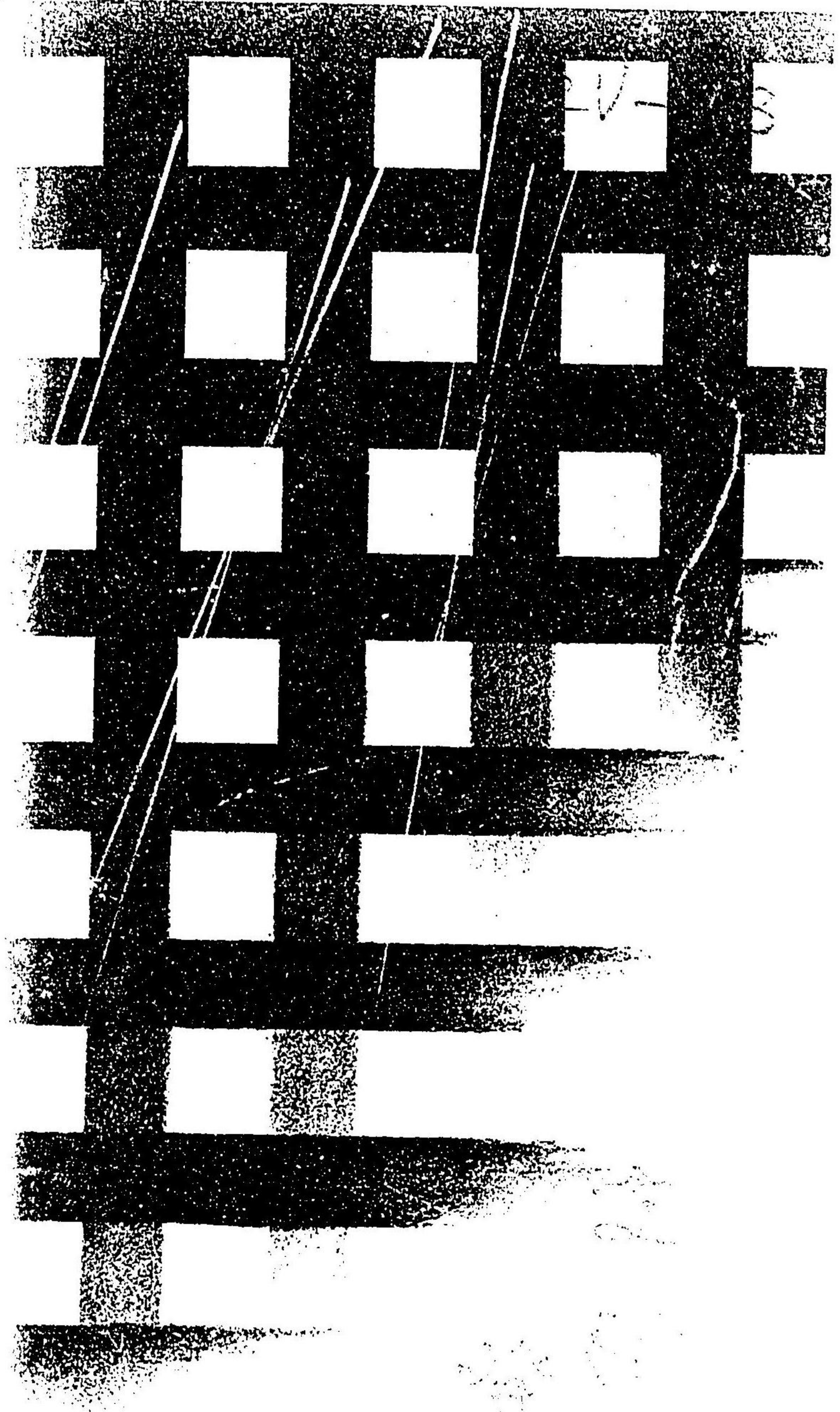
不許複製

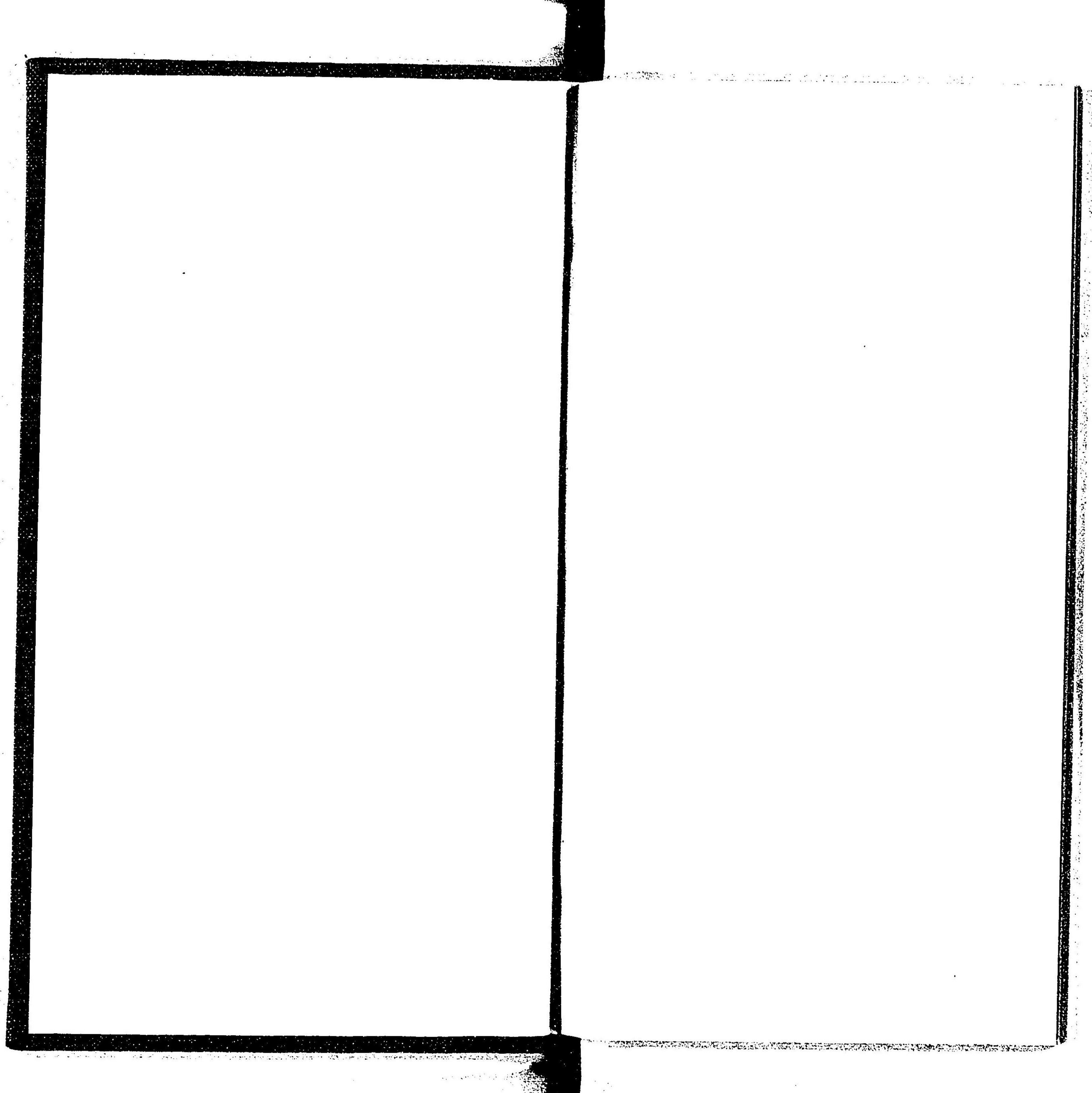
石版印刷 香山秀吉
 木版印刷 西村熊吉

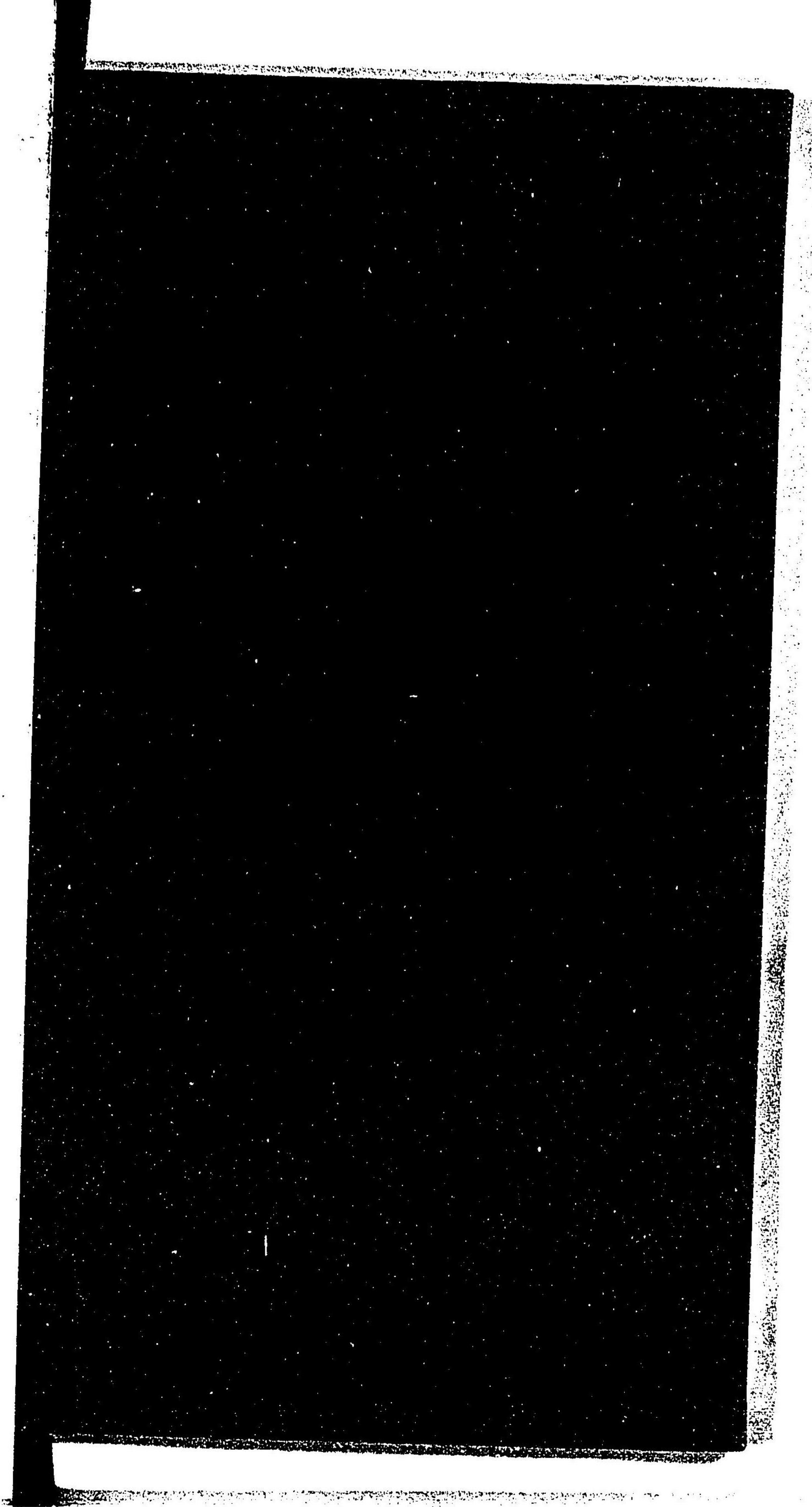
大賣捌

東京	東京堂	岡崎屋	中西屋	林平
三松堂	嵩山房	前川	目黒	
大坂	盛文館	吉岡	積徳堂	
名古屋	川瀬	三輪	淺見	小澤

東京 横濱 大坂 名古屋 丸善







96
190

林
復
寫

070270-000-6

96-190

当世画家評判記

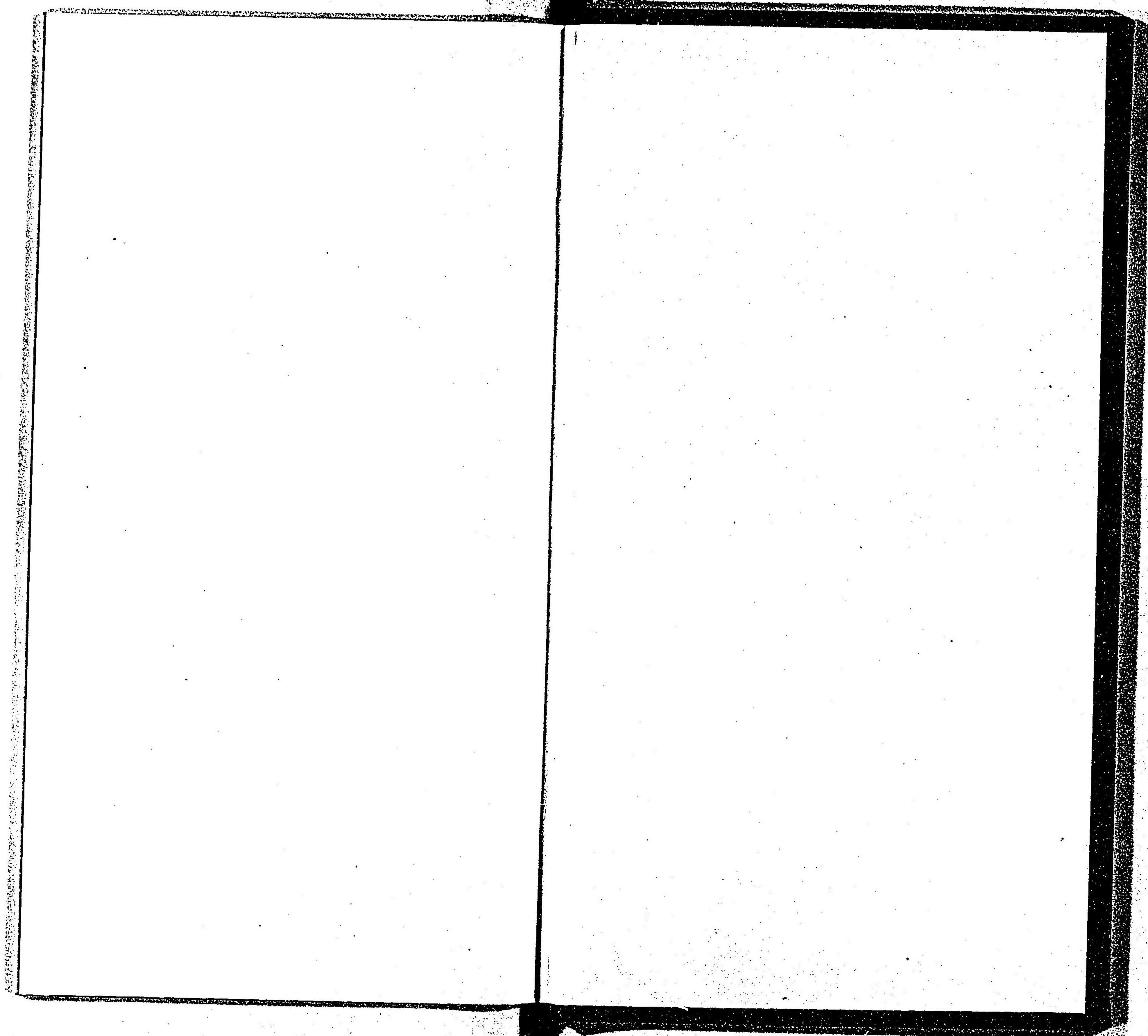
春蘭道人

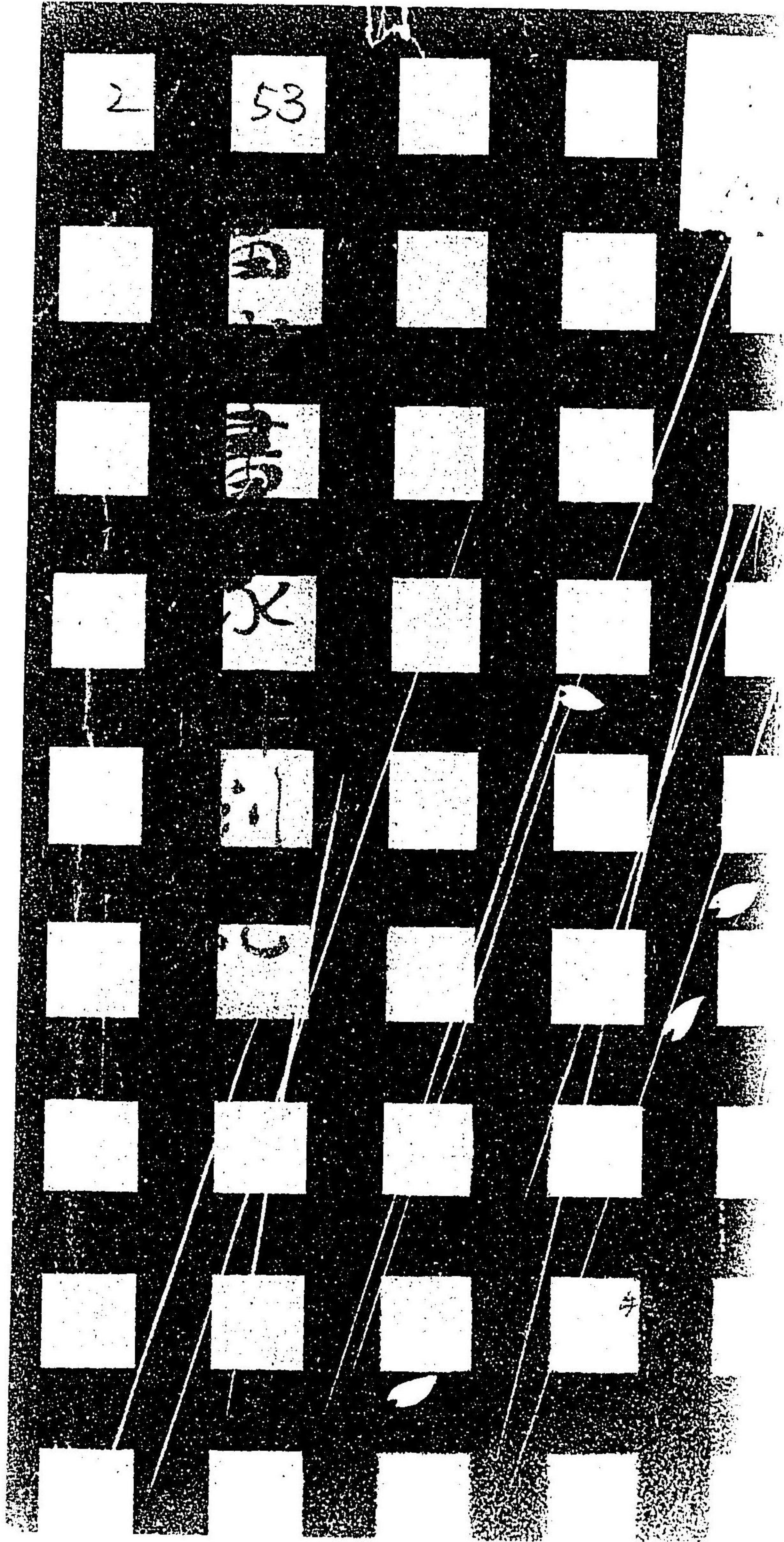
秋菊道人／編

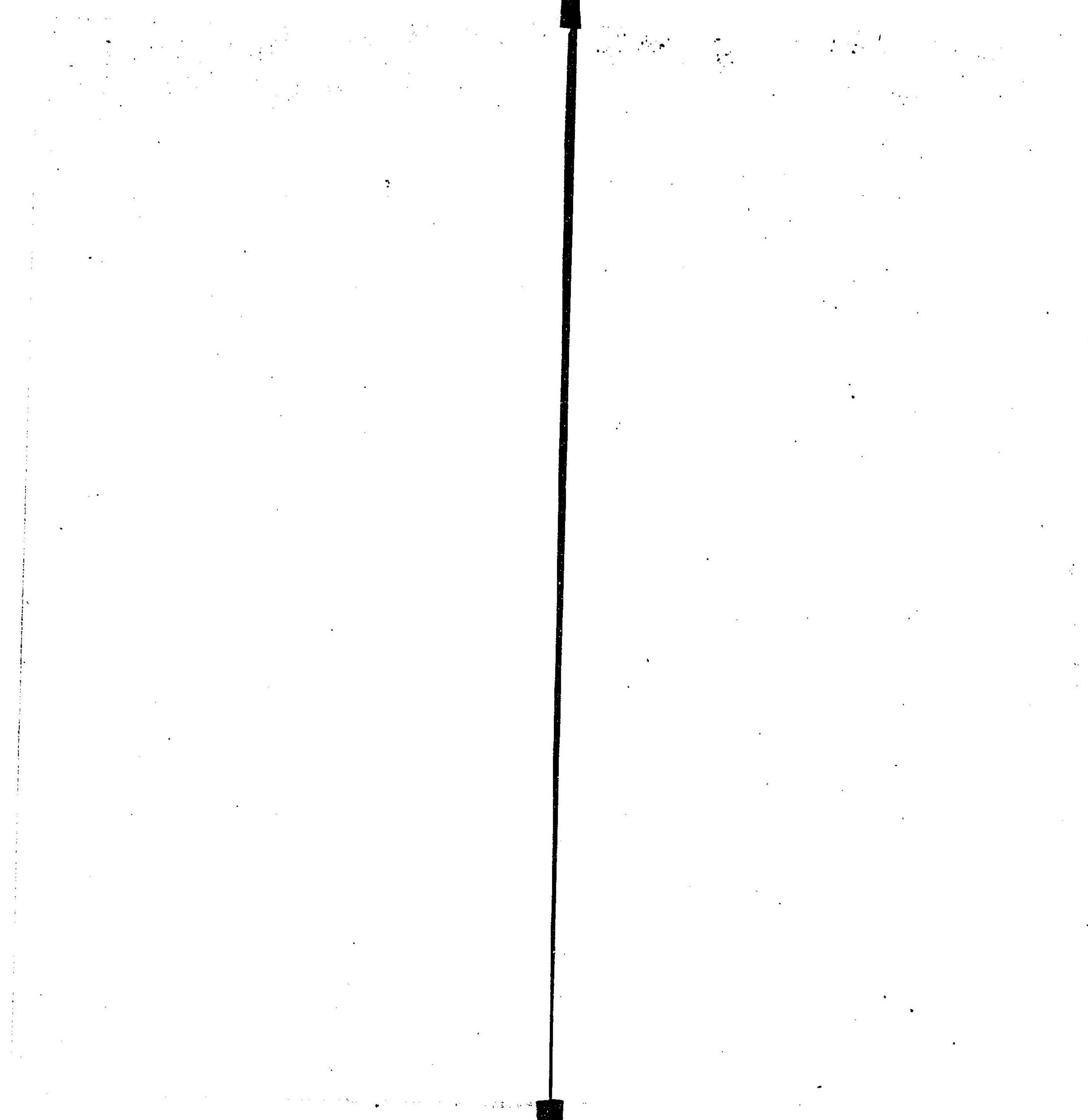
M36

CEC-1338











The text in this block is extremely faint and illegible. It appears to be a list or a series of entries, possibly a table of contents or a list of items, but the individual characters and words cannot be discerned. The text is arranged in a vertical column on the right side of the page.